『勧善懲悪覗機関』論

埋　忠　美　沙

『勧善懲悪覗機関』をめぐる黙阿弥の自負と近代以降の作品を取り巻く状況の違いは何を意味するのだろうか。仮に思うのは、本作の面白さとは小団次の演技に因るところが大きかったのではないか、ということである。筆者はこれまで黙阿弥と小団次の関係についてその提携作を通じて論じてきたが、『勧善懲悪覗機関』によって今一度その提携を考えたい。

一、作品の概要

『勧善懲悪覗機関』は文久二年閏八月守田座上演、黙阿弥四十七歳の作である（以下『覗機関』）。市村座が本属の黙阿弥はスケの立場で、番付上の立作者は三代目桜田治助、他には狂言堂左交、篠田金次らの名がある。閏八月八日初日、九月三十日千秋楽（番付の朱筆書入れ）。[5]「小団次の評よく大入」（「著作大概」）、「狂言評よく〳〵大入」（朱筆書入れ）とあるごとく好評であった。

出演は小団次（医師村井長庵・伊勢屋番頭久八）の他、二代目中村福助（伊勢屋千太郎）、三代目市川市蔵（貝坂の忠蔵・正木甚三

はじめに

河竹黙阿弥は文久元年（一八六一）から、市村座に所属しながらも守田座の四代目市川小団次の為にも作品を書き続けた。守田座時代の両者の提携作には『玆江戸小腕達引』（腕の喜三郎）、『曾我綉俠御所染』（御所の五郎蔵）等があるが、代表作が『勧善懲悪覗機関』通称「村井長庵」である。小団次が極悪非道の医者村井長庵と善人の番頭久八という対照的な二役を演じた本作は、黙阿弥自身が「三人吉三は自分が最も心を尽したもので、中にも村井長庵などは、我が終生の世話物第一の出来と思はる」[1]と語った自信作として知られており、それが本作を代表作とする理由でもある。

一方で近代以降の評価はいささか異なり、知識人達によって「朝から晩まで心持ちの悪い幕ばかり」[2]「今見ては理にかなはぬ事も多く惨めたらしく長たらしく」[3]等と酷評された。こうした感覚は演者にとっても同様だったようで、昭和三年六月帝国劇場を最後に上演は激減、その後はわずか二回しか上演されていない。[4]

郎）、五代目嵐雛助（浪人藤掛道十郎）、五代目坂東三津五郎（傾城小夜衣）、初代中村鶴蔵（早乗三次・甲州屋吉兵衛・紙屑屋六右衛門）、二代目尾上菊次郎（道十郎女房おりよ・上ぎらおかん・傾城遠山）。主立った役者は小団次と菊次郎と花形の市蔵だけという、無人芝居であった。

役割番付のカタリには「仁政美談」と「恋情奇談」と大きく記されているが、これは本作を構成する二つの筋を示す。それは極悪非道の医者村井長庵の悪事の物語（以下「村井長庵」）と、傾城遠山と塩冶浪人正木甚三郎の物語（以下「遠山甚三郎」）である。黙阿弥作品の特徴は独立する二つの筋が交互に進む「テレコの構造」であるが、それは本作も同様で、二つの筋は傾城遠山の存在によって結ばれるものの複雑に絡むことはない。黙阿弥はスケの立場だが、「村井長庵」は主に黙阿弥（部分的に治助）、「遠山甚三郎」は治助の分担で、本作は黙阿弥によるところが大きい。「遠山甚三郎」の山場である「吉原鶏舌楼の場」は興行半ばに抜かれており（主筆書入れ）、初演の段階から「村井長庵」によって知られてきた作品であった。

本作を論ずる前に、台本の翻刻を紹介しておきたい。本作が黙阿弥の自信作であったことは先述したが、それを裏付けるのが黙阿弥の生前世に出た二つの翻刻、すなわち「読売新聞」と『狂言百種』の双方に収録されたことである。明治二十一年に「読売新聞」紙上に計四作黙阿弥の台本が掲載されたが、『鼠小紋東君新形』と『三人吉三廓初買』に続く三作目が『覗機関』であった。[6] その予告には「〇芝居正本　三人吉三の花やかなる跡なれば実の有るものをと黙阿弥翁と相談のうへ今度は小団次の当り狂言中にても諸方で度々出る村井長庵（勧善懲悪覗機関）の正本を出すべし」[7]とある。さらに明治二十五年に『狂言百種』の出版が始まると記念すべき一作目に選ばれた。黙阿弥が生前二度も校訂に関わったのは本作と『三人吉三』だけで、「実の有る」作品として黙阿弥が本作を誇っていたことが裏付けられる。

初演の資料に基づき作品の構造を確認する。初演の資料としては、各種番付、台本（初演系写本）[8]、合巻[9]がある。それぞれ収録する場面が異なるが、絵本番付によると上演の場割は以下の通り。初演系写本のうち上演に近いと思われる大惣文庫本によって情報（場立、場名、作者署名）を補った。「村井長庵」の場面には＊を付けた。

【絵本番付】		【大惣文庫本】	【作者署名】
小浜八幡	第一番目三立目	小浜八幡社内の場	松島松作
長庵寓居＊	第一番目二幕目	小路街村井長庵内の場	桜田治助
赤賀根＊		赤羽根橋ころしの場	
		同札の辻の場	
四辻番所＊	二幕目返し	赤羽根辻番所の場	河竹新七
吉原鶏舌楼	第一番目三幕目	吉原丁子屋の場　桜田治助／狂言堂[10]	
衣紋坂			
だんまり	第一番目四幕目	厳島明神の場	狂言堂
猿楽町			
長庵内＊	五幕目	麹町長庵内の場	河竹新七
伊勢五店＊	第一番目六幕目	三河町伊勢屋店の場	河竹新七

同二階の場＊　　不明
欠　　河竹新七
中田圃＊　第一番目八幕目　飯田橋紙屑屋の場
紙屑屋＊　　寺門町裏借家の場
藤掛裏借家＊
日本堤＊　第一番目九幕目　日本堤の場　　河竹新七
問注所＊　第一番目大切　足利問注所の場
河竹新七／桜田治助

【梗概】

［長庵寓居・赤賀根］麹町の町医者村井長庵は、妹婿の百姓重兵衛からその娘お梅の身売りした金五十両を奪うため、夜明け前に出立させ闇に紛れて殺害。近所の浪人藤掛道十郎の傘を死骸のそばに捨てる。長庵が立ち去る姿を人入れ稼業の貝坂の忠蔵が目撃する。

［四辻番所］道十郎は無実の罪で投獄され、やがて獄死する。

［吉原鶏舌楼・衣紋坂］傾城小夜衣（妹娘お梅）は伊勢屋の若旦那千太郎と、傾城遠山（姉娘お蝶）は正木甚三郎と深い仲、塩冶の浪人甚三郎は男芸者になり御家の重宝を探索中である。重兵衛殺しの真犯人が生きているという占いが出たため、甚三郎は姉妹の仇討ちを助力するつもりで、上役津賀兵太夫は姉妹を励ます。重宝の香炉を盗んだ犯人は御家没落の際出奔した兵太夫の妹呉羽で、今は上ぎらおかんと名乗る。甚三郎に惚れているおかんは香炉をちらつかせて「遠山命」の彫り物を削らせる。香炉を持って逃げたおかんを兵太夫が刺す。おかんは恋の叶わぬ仕返しに甚三郎を浪人させるために重宝を盗んだと告白、遠山は御家帰参の餞とおかんへの香花料として甚三郎に財布を与え、別れを告げる。

［だんまり］畠山重忠は日月の旗を奉納に厳島を訪れる。袈裟太郎を捕らえるのが目的である。一方平家の残党集めに暗躍する盗賊の法花山袈裟太郎は、宮島の海底に沈む九州天笠伝来の普門間の一巻を手に入れんとこの地に来ている。重忠、傾城横笛、待宵侍従、そして袈裟太郎は、闇の中で日月の旗と普門間の一巻を奪い合う。劇中劇の趣向。

［猿楽町］猿楽町三丁目の小屋（＝守田座）の幕間。芝居を楽しむ千太郎は長庵の来訪を知らされ、芝居茶屋へ行く。

［長庵内］重兵衛の女房おそよが娘に会いに江戸へ来たため、長庵は悪事の露顕を怖れて早乗三次に殺害を依頼する。長庵は小夜衣の親元身請けをすると千太郎を騙して五十両をせしめる。

［伊勢五店］千太郎は身請金のため、三次が質入れした白露の短刀を蔵から持ち出す。長庵は三次をそそのかし、短刀を請け出すとして伊勢屋を強請らせる。番頭久八は千太郎の罪を引き受け店を追われる。

［中田甫］三次は娘に会わせるといっておそよを連れ出し、殺害する。

［紙屑屋・藤掛裏借家］道十郎の妻おりよは二人の子供を抱え貧困の毎日。そこへ紙屑買いに零落した久八が来合わせ、主従であることが明らかになる。忠蔵の証言で長庵が道十郎殺しの真犯人と明らかになり、再吟味を願い出ることにする。

［日本堤］小夜衣と千太郎は心中を決意して廓を抜けたが追っ手がかかり、小夜衣は三次に連れ戻される。久八は千太郎の自害を止めるが、刀が誤って千太郎の脇腹に刺さり千太郎は死ぬ。久八は主殺しの罪で自首をする。（浄瑠璃「恨葛露濡衣」）

［問注所］おりよの訴えで長庵は大館左馬之介の取り調べをうける。忠蔵が証言しても長庵は白状しない。しかしおそよの怨霊に苦しみ三次が自白、長庵の罪状が明らかになる。長庵はなおも罪を認めないが、久八の忠義に打たれてついに自白し死罪、道十郎の無実が立証される。久八は千太郎の遺書により無罪となり、さらに千太郎の兄であることがわかり伊勢屋の跡取りとなる。小夜衣は久八と千太郎の実父甲州屋吉兵衛が身請けして養育することとなりめでたくおさまる。

一方、草稿の段階では少々異なる構成だったようだ。草稿の内容は辻番付、初演系写本（演博本）、合巻によって知れるが、上演との主な違いは二点である。第一点は、久八の出自を発端（駿府宿旅籠屋、江尻縄手辻堂、藤沢町甲州屋）で見せていたことで、その内容は次の通り。

［旅籠屋］京・安養寺門前の料理人藤兵衛は女房と死に別れ、幼子を抱えてしるべを頼り江戸に向かう。道中の旅籠屋で土地の人々の人情に触れる。

［辻堂］僅かな路金も尽きた藤兵衛は仕方なく幼子を捨てる。その子は村の組頭久右衛門によって拾われる。

［甲州屋］江戸へ来た藤兵衛は甲州屋の婿になり吉兵衛と名を変えた。新たな女房との中には二人の息子が生まれ、兄千之助は店を継ぎ、弟千太郎は質店伊勢屋の養子になった。三十年も昔を夢に見た吉兵衛は、かつて捨てた我が子に思いを馳せる。

「問注所」で判明する久八と千太郎の関係を実際に見せていたわけだが、発端は初日前に削られた。その代わりに「遠山甚三郎」の発端にあたる「小浜八幡」が追加されたようで、「小浜八幡」は草稿に基づく辻番付と合巻には収録されていない。これは所謂「駄三つ」で、相中役者が修業のために勤めるだけの場である。初演系写本（東大本）によると、重宝の香炉が紛失し甚三郎が浪人する様子が展開したが、退屈な内容である。

第二点は、草稿では「遠山甚三郎」に関わる「石国橋」があったこと。台本がなく詳細は不明だが、辻番付と合巻には上ぎらおかんが千太郎に濡れかかる様子が描かれており、「吉原鶏舌楼」に繋がる伏線だったと思われる（合巻は絵のみで文章は掲載していない）。

再演以降、「村井長庵」のみの上演が主流となり、近代以降の翻刻[11]も同様の幕を収録する。『日本古典文学大辞典』や『歌舞伎事典』といった辞典類も「村井長庵」のみを紹介しており、「遠山甚三郎」に関わる筋は研究と上演の双方で失われた。

「村井長庵」以外の場面について触れておきたい。「だんまり」は現在における「宮島のだんまり」の初演である。唐突に大時代の話になるが劇中劇の趣向で、幕を引くと千太郎が客席から登場する展開が面白い。

「遠山甚三郎」は、吉原の傾城遠山と塩冶の浪人正木甚三郎の物語である。その筋立について、渥美清太郎は「「吉原俄番付」の焼直し」と指摘する。[12]『吉原俄番付』（並木五瓶作、文化元年九月市村座）は女賊唐犬お吉が吉原の太鼓持・折井弥市に惚れるが、弥市には深い仲の女がいるという話だが、指摘のごとく『覗機関』の上ぎらおかんと甚三郎の関係性はお吉と弥市にのっとっている。一方で役名については、歌舞伎で知られていた「遠山甚三郎」という人物を恋人の名に分けている。この人物の由来はやはり渥美が「昔、といっても天明以後であるが、遠山甚三郎という侍が、世話狂言にしばしば現れた。その実説は不明だし、嚆矢もハッキリしないが、吉原の遊女との情話であったらしい」[13]とする。黙阿弥は本作に先立ち『都鳥廓白浪』（嘉永七年三月河原崎座）に登場させており、お俊に横恋慕する田舎侍という設定。とはいえ、渥美があげた先行作および『都鳥廓白浪』と『覗機関』に共通点はない。『覗機関』に関係して補足すると、典拠の講談（実録）「村井長庵一件」においては姉娘の恋人の存在感は薄く、最後に「丁山と小夜衣の両人は程なく曲輪を出でてより、姉の丁山、二世と言いかわせし遠山勘十郎といいし人も病死なせしかばその跡を弔い」と名前が一度登場するのみである。遠山甚三郎とよく似た名前であることからも、『覗機関』の影響でその役名が持ち込まれた可能性があるだろう。

二、坂東太郎と名草劇斎

『覗機関』は小団次の存在によって語られてきた作品だが、一方で守田座の上演前から別の役者が得意としていたという説がある。それは「読売新聞」（明治二十六年四月二十九日）掲載「〇村井長庵の狂言は故小団次の新脚色（かきおろし）にあらず」という記事が伝える、当時小芝居で活躍していた坂東太郎の話である。幕末、守田座に出演した太郎（当時は中村鶴助）は小団次から次のような契約を持ちかけられたという（以下、鶴助の表記は「太郎」で統一）。

> 彼〔注、太郎〕が旅先の興行に大入を取りていつも好評を得るは村井長庵に鋳掛松なりとて其狂言筋立をも詳しく物語りたるに小団次は膝を打て其狂言を深く賞賛し何卒其狂言を我に譲つて下され〔略〕斯くて小団次は狂言作者河竹新七（黙阿弥翁）に相談し右の狂言を添削して興行せしに果して名玉の誉著るしく鋳掛松と云ひ村井長庵と云ひ非常の好評にて大入を占め遂に同狂言は小団次の特有物となりたる

作品を提供した礼に太郎を座頭に昇進させる約束をしたこと、一連のやりとりを秘密にすることを小団次と約束をしたこと、座頭にする約束を果たさぬまま小団次が没したこと、そしてその事情を知った初代左団次が日本橋座（明治座）落成の折に太郎を迎え亡父の契約を果たすつもりである、と記事は結ぶ。

この記事は事実だろうか。太郎の素性は不明だが、嵐三津蔵と中村梅蔵を経て、文久二年正月から中村鶴助の名で江戸の劇壇に現れた。[14] 守田座に属し同年閏八月の『覗機関』に出演しており、百姓重兵衛、津山源吾、一色左京之助の三役（役割番付による。一色左京之助は台本には登場しない）。ただし番付上の配役よりも重要なのは、絵本番付の朱筆書入れにある二つの情報である。

此処の長あん　はしめ十日計り小団次勤而其後つる助絵ゆづる
十兵へやくは国三郎也　夫より狂言評よく〳〵大入ニなりし
故　小団次又々勤ル（長庵寓居）

此処の二タ場も前朱筆のとふり　且又末ニいたり又々いぜんの
かわりニなる（赤賀根、四辻番所）

これは長庵による重兵衛殺しからその取り調べまでの三場の情報で、興行途中から長庵の登場場面の半分程度を太郎が演じたことがわかる。小団次はいささか癇癖な性格で、病気と称し休演することがしばしばあった。[15] しかし最前の記事を踏まえこの情報を得ると、この配役変更は単なる小団次の出演拒否ではなく太郎に対する配慮とも思われ、本作の成立に太郎が関与していたという情報の信憑性を高める。

その後、太郎は小団次の門弟となり初代市川小文次を名乗る（文久四年二月）。小団次が他座に出演しても守田座に出続け、『富士三升扇曽我』（慶応二年二月守田座、以下『鋳掛松』）で小団次と同座した。『読売新聞』で太郎が関与したと記されるもう一つの作品だが、その成立は講談種と知られるのみで、[16]『覗機関』同様、やはり太郎の関与が指摘されたことはない。この興行中「曽我」の敷皮の諫言の場に、並大名の小文次が睡気を催し、両手を延ばして欠伸をすると、突然小団次が飛掛って背骨を蹴倒し、己の弟子で無法な奴だと舞台で踏みにぢった」[17] という事件があった。もし作品の成立に太郎が関わっているとしたら『覗機関』の頃とは大分態度が変わったものだが、『鋳掛松』成立への太郎の関与は詳らかにならない。「鋳掛松」興行中の三月十日に小団次が発病、五月八日に五十五歳で没した。師匠を亡くした太郎は守田座に出続けたことが縁となったのか十二代目守田勘弥の門弟となりここで坂東太郎を名乗る（慶応二年八月）。[18] いつから小芝居に移ったのかは未詳だが、「容貌、動作ともに小団次に酷似しているところから、その当り芸を売り物に地方を廻」[19] り、小芝居の名優として最晩年まで舞台に立ち続けた。晩年の舞台を見た三島霜川は印象的な役の一つに『蔦紅葉宇都谷峠』の文弥をあげており、[20] やはり小団次譲りの芸風がうかがえよう。

太郎は計三度も長庵（と久八）を演じたが、[21] その最初は小団次の死後すぐの慶応四年四月守田座のこと。これが『覗機関』の再演である。無人の夏芝居とはいえ守田座で主演するのは異例の大抜擢で、やはり作品との因縁を感じさせる。なお、その様子は「太郎の長庵小団次うつしにて其儘との評判なりしが不入」[22] と伝わる。『覗機関』の典拠は講談「村井長庵一件」だが（後述）、これら太郎と『覗機関』の関係性を踏まえると「読売新聞」の情報もあながち嘘とは思われない。太郎が小団次に「詳しく物語りたる」作品が、講談「村

井長庵一件」に基づくものだった、ということになるのだろうか。

『覗機関』に先立って村井長庵は演じられていたのか。同名が登場する作品は見出せないが、渥美清太郎は『青砥稿』（桜田治助作、弘化三年七月市村座）に登場する悪医者名草劇斎（四代目中村歌右衛門）が長庵の原型との説を紹介している。[23]『青砥稿』は曲亭馬琴の読本三作の劇化だが、名草劇斎はそのうち『刀筆青砥石文』（櫟亭琴魚作・曲亭馬琴補・歌川国直画、文政三年）の主人公である。『青砥稿』においては劇斎の筋が完結しておらずその造形は不明瞭だが、『刀筆青砥石文』については以下のごとく。明代小説『歓喜冤家』の「香菜根喬粧姦命婦」を粉本とした犯罪裁判小説で、京の医者名草劇斎が妾お礫と姦通を知りお礫と女中を殺害、その罪を間夫に負わせるも青砥藤綱によって解決するという筋。劇斎の性格は次のように記されている。

> 抑々劇斎が人となり、刻薄にして弁を好み、吝嗇にして尊大なり、書を読む事を好みしかば、医術儒学に暗からず、田舎に稀なる博物とて、しるも知らぬも憚れば、みづからその学問を、鼻に被て俗を直下し、動もすれば古書を引き、医論を好みて近郷なる、老医にすら口を開かせず、常に人の非をいうて、楽にする癖あれども、利の為には己を枉て、勢に就ざる事なし。只是詞章記誦の学にて、聖人の大道を学び得たるにあらざれば、智術に耽りて訟獄を事とし、行状を薄くして、愆を飾る事多かり。[24]

「村井長庵一件」との共通点は作品冒頭あたりの展開で、主人公が田舎を嫌い都会に出ること、家族を家族とも思わぬ行動をしていることがあげられる。とはいえ、劇斎が尊大でありながらもうまく取り繕い名医と思われているのに対し、長庵は胡散臭さを隠さずに周囲から敬遠されており、造形は異なる。

また、女好きの劇斎に対して長庵は女っ気がないが、この違いは事件そのものに関わる重要な設定である。すなわち劇斎の犯罪とは姦通を巡る殺人であり、かたや長庵は金への執着から多くの悪事に手を染める。歌舞伎の場合は女形に役を与えるためか長庵の協力者「後家定」が登場するが、描写に乏しく、とってつけたような長庵との関係性に艶っぽさは全くない。[25]『村井長庵』には色合の場はないと言って差支えない。これは黙阿弥にとって異例である[26]」という指摘は「遠山甚三郎」の筋が失われたことにも起因するものだが、それを除いてももっともな感想である。とはいえ色気の無さは批判すべきことではない。それは他者に共感し得ない長庵の性格を際立たせ、色悪とは異なる悪の個性を生むのである。

太郎が小団次に語った演目は詳らかにならず、『青砥稿』の劇斎は共通点はあるものの長庵の典拠と言える決定的な要素はない。それでは典拠の講談とはいかなる共通点と相違点があるのか、次章で考察する。

三、実録・講談「村井長庵一件」とは

村井長庵の筋は、実録と講談で人口に膾炙した「大岡政談」の一

編「村井長庵一件」を典拠とする。講談が典拠であること、そして歌舞伎に先だち講談「村井長庵一件」が成立していたことはいくつかの点から明らかである。第一に、番付のカタリに「御好任読切講釈」とあること。第二に、合巻の序詞に「藪医ときひた邑井長庵、悪と善なる久八が忠直邪正の講談を、種におろして桜田・河竹、守田の櫓に名題をあげる」と記されていること。第三に、合巻の袋が辻ビラ風の意匠になっていること。第四に、絵本番付「四辻番所」の絵面に「文車」「伯円」のビラが描かれていること。このビラについては「当時世話講談の名手として名高かった一立斎文車（初代）、松林亭伯円（二代目）が「村井長庵」を得意としていたことが判明する」との指摘がある。[27]

黙阿弥はしばしば講談を素材としたが、なかでも「大岡政談」に関わる作品は多く、江戸時代には『吾嬬下五十三駅』（天一坊一件）や『敵討噂古市』（豊島屋一件）があり、さらに明治には『梅雨小袖昔八丈』（白子屋一件）および『扇音々大岡政談』（天一坊一件）を書いた。「大岡政談」とされる事件の大部分は大岡自身の裁きではなく、中国の裁判故事やその翻案、そして江戸期以降の名奉行による事跡を典拠とする。しかし「村井長庵一件」は不明な点が多く、実説や裁判物語としての原型はもとより、いつから「大岡政談」の一篇となったのかも従来言及されていない。

唯一詳らかになっているのは、長庵が姪小夜衣の身請金として千太郎から五十両受け取るが、その手形の文字がいつの間にか消えてしまう、という奸計についてで、井原西鶴の裁判小説集『本朝桜陰比事』（元禄二年刊）所収の三―二「手形は消て正直が立」の趣向とされる。[28] 文字が消えた理由は「烏賊の黒（くろ）みに粉糊を摺まぜて書る物は三年過れば白紙になるといふ事本草に見へたり」というもので、摩訶不思議な仕掛けを楽しむ短編である。

この趣向は実録講談、そしてそのまま歌舞伎にも取り入れられ、例えば実録には次のように記された。

その時千太郎、「いかにも御自分がしたためられし請け取り証文、これ見られよ」と言いつつ一札を懐中より取り出だし、長庵が前へすり寄り、開きてみればこはいかに、文字は消えて跡形もただ情けなき白紙なり。これは長庵が悪計にて、跡の証拠に成らざるよう、最初よりたくんで置いたる大悪無道、恐ろしかりける事どもなり。

評に曰く、証文の文字の消え失せしは、長庵が計略により烏賊の墨にてしたためしゆえならんか、古今にそのためし有りとかや。

『本朝桜陰比事』からの影響は明らかだが、実録のこの記事にはいささか違和感がある。それは肉親の殺人を良心の呵責なくおこなう長庵にとって、この行為が「大悪無道」とは言い難く、この趣向ありきで「村井長庵一件」が成立したとは思われないためである。すなわち、「村井長庵一件」の成立の経緯は異なる点から考察する必要があるだろう。

「村井長庵一件」はいつ「大岡政談」の一篇になったのだろうか。実録を調査すると、現存する諸本の中で最も古いとされる『隠秘録』[29]

に村井長庵の名前はなく、類似する事件もない。初期の『板倉大岡両君政要録』[30]、その後の『大岡忠相比事』[31]『大岡仁政録』[32]『大岡秘事』[33]、別系統の事件を収録する『大岡美談』[34]においても同様である。

実録以外でも、歌舞伎『名誉仁政録』（桜田治助作、嘉永五年七月市村座）や読本『大川仁政録』（松亭金水作、安政元年―四年）は「村井長庵一件」と無関係であり、講談の番付に「村井長庵」の題目が登場するのは明治以降である。[35] すなわち管見の限り、「村井長庵」の名は、歌舞伎以外には近代以降の活字本にしか確認できないのだ。

こうした事情ゆえ、実録講談の「村井長庵一件」を知るには近代以降の活字本を底本とせざるをえない。[36] 改めて述べるまでもなく写本によって流布する実録は物語が成長し、講談には台本が存在しない。すなわち明治期に出版された実録講談の活字本の内容が逆に歌舞伎の影響を受けている可能性もあるのだが、その点を念頭におきつつ次章では『覗機関』における黙阿弥の作劇法を考察する。

四、裁判の経緯――実録、講談、歌舞伎

そもそも「村井長庵一件」の眼目とは何だろうか。「村井長庵一件」は、大きく分けて二つの裁判から成り立っている。第一が村井長庵の裁判で、長庵の犯罪は次の五件である。

(1) 重兵衛殺しと姪（姉）の身売り金の着服。
(2) 藤掛道十郎に重兵衛殺しの罪をなすりつけ、道十郎は牢死。
(3) 姪（妹）を御殿勤めと偽り身売りさせ、身売り金を着服。
(4) 妹を殺害（下手人は三次）。
(5) 手形を偽造し、千太郎から姪の身請金を着服。

実録講談、そして歌舞伎も、この五件を収録しており、細かい相違はあれど要点に違いはない。

第二が久八の裁判で、その犯罪は近世における大罪の主殺しである。事件の経緯は実録講談と歌舞伎では異なる。実録講談では、廓通いを止めない千太郎の胸ぐらを取って行動を問い詰め、勢い余って絞殺する。一方歌舞伎では面目なさに自害しようとする千太郎を止めようとしたために刺殺してしまう。初演役割番付のカタリに「形振も人目堤朝帰りまち儲たる胸づくし」とあることから、実録講談の描写が原型なのだろう。

大岡は長庵と久八をいかに裁いたのか。実録では次のように進行する。

(1) 長庵は証人の瀬戸物屋忠兵衛に対し、自分が忠兵衛の女房と姦通しているための報復だと反論。しかし女房が子宮の病気（＝性行為ができない）とわかると、ただ共寝していただけだと覆し、虚言が顕れる。
(2) 大岡は長庵を拷問にかける。石を七枚まで抱かせても白状しないため拷問は中止。
(3) 長庵は共犯者の三次が証言しても白を切り続ける。
(4) 久八による千太郎殺しの裁判が起こり、長庵の事件と結びつく。

こうした段階を経て、大岡は長庵の犯罪（重兵衛殺し、身請金の騙り、妹殺し）を挙げ連ねることで悪事の全貌を詳らかにする。すな

わち長庵があまりに多くの悪事を重ねたため、決定的な証拠がなくても関係者全員の証言から立証できたのである。この特徴は、「その数々の悪事一時に露顕して言い破る事あたわず、ついに口書爪印をなすに至る」という一文にも示されている。

その後は久八の裁判となる。大岡は久八を減刑したいと思案するが、主殺しは大罪で手立てがない。しかしその最中に久八と千太郎が兄弟と判明、二人は傍輩であって主従ではないという理屈で減刑する。手柄を「久八が主殺しのかどは越前守殿の明断によって、のがれるいとぐちにこそ成りにけれ」と記しているが、久八を減刑できたのは兄弟という関係が偶然明らかになったためである。とはいえ遠島は免れず、翌年の大赦で久八は帰島する。つまり実録の大岡は、裁判で決定的な力を発揮していない。

講談では、長庵の悪事は次の経緯で明らかになる。

(1) 瀬戸物屋忠兵衛の証言に対し長庵は、自分がその妻と姦通しているための報復だと反論（ここまでは実録と同じ）。大岡は仁術を大切にする医者が姦通を自ら明かすことからして真っ当ではなく、それが虚言という裏付けになると喝破する。

(2) 下手人の三次が幽霊に憑かれ発狂して真相を口走る。

(2)の幽霊は企図せぬ力だが、(1)では大岡が長庵を見事に言い負かす。続く千太郎殺しの裁判ではその死因を藪医者が卒中と診察していたため、大岡はそれを採用することで久八を無罪に導く。すなわち講談の大岡は、長庵と久八の双方に対して名奉行らしい手腕を発揮し事件を解決している。

歌舞伎では、長庵の悪事は以下の経緯で明かされる。

(1) 忠蔵の証言に対し長庵は、忠蔵が道十郎の妻おりよと姦通していて、それを知る自分を陥れようとしていると反論。密通の時期に忠蔵は旅行中、おりよは病で伏せっており、長庵の虚言が顕れる。

(2) 三次が幽霊が怖いからと改心して自供。

大館（＝大岡）は三次の自供を武器に長庵を問い詰めるが決定的な証拠はなく、長庵は悪事を認めずに三次に「地獄で逢はうよ」と捨て台詞を吐く。千太郎殺しの裁判に移り、まず久八と千太郎が兄弟と明らかになる。さらに千太郎の書き置きが見付かり、元より久八への申し訳から自害の覚悟であったことが証明され、久八は無罪となる。その様子を聞いていた長庵は久八の忠義にうたれて改心、罪を認めるのである。なお長庵が改心するのは官憲を意識した翻刻時の改変ではなく、書き下ろしからの設定である（初演系写本が同様の記述）。裁判の展開は実録よりも講談からの影響が濃厚である。

このように実録・講談・歌舞伎は裁判の内容が少しずつ異なる。共通するのは決定的な証拠が無いなか関係者が次第に集まり立証される点といえるが、[37] 裁判物語としての特徴は乏しい。歌舞伎ではそこに物足りなさを感じた人がいたようで、後世の例だが「長庵が罪過を大舘が詰問するに、さらにその証拠をあげず、唯有体に申せとか己れが心に問へとかいへど、かくては名奉行といはれたる証とはなし難し」（依田学海）[38]、「結末大に拙なり。〔中略〕二條の話を一條に結びなせる技倆拙ならずといふべきも、物足らず」（幸田露伴）[39]と批判された。学海は元より黙阿弥に批判的な人物でその点差し引いて考える必要はあるが、概ね首肯すべき指摘だと思う。すなわち

「村井長庵一件」は大岡の活躍や真相を紐解く過程を眼目とした物語ではなく、悪事の手法とそれに苦しむ人々、そして登場人物（長庵や久八）の個性的な造形によって成り立っているのだ。

事件の典拠となった実説や故事は不明、さらに江戸時代における実録の記事も見出せないが、「大岡政談」における説話成長の過程として聊か気になるのが「栗橋殺人事件」（以下「栗橋一件」）との関係である。これは江戸幸手栗橋近くの穀物問屋幸右衛門の殺人事件である。幸右衛門の息子の指南役の浪人沢田左内は幸右衛門の娘と恋仲になるが、それを咎めた家主役の喜平次を恨み、幸右衛門を殺した罪を喜平次になすりつける。大岡は喜平次が自白したためにお仕置きにしたと公表。後に左内は大岡の尋問を受けるが、喜平次がすでに処刑されたことを引き合いに出し「喜平次此白洲へ出候はゞ白状仕るべし」と述べる。そこで大岡は喜平次が生きていることを明かし、左内を捕らえるのである。

「村井長庵一件」との共通点は事件の経緯である。すなわち「此たばこ入手紙を死骸の側に置、此人殺しを喜平次にぬり付、日頃の恨みを晴さんとのたくみ也」[40]とあるように、死骸の傍に第三者の持ち物を置いて冤罪に陥れる手法が一致する。しかしその後の展開は異なり、「栗橋一件」では冤罪を見抜いた大岡が陥れられた人物を密かに生かし、それがこの事件の眼目となる。一方「村井長庵一件」はこの段階では中山出雲守の裁きゆえ道十郎の冤罪は晴れず、これを発端に多くの事件が引き起こされる。改めて述べるまでもなく古今の裁判物語において裁判官の力量の一つは冤罪を見破ることであるし、証拠品ねつ造の手法もありふれている。しかし、仮に「栗橋一件」を大岡が裁かなければ「村井長庵一件」のごとく多くの事件が引き起こされており、そうした発想のもと「栗橋一件」が長編化して「村井長庵一件」が生まれた可能性があるように思われるのだ。「栗橋一件」は『大岡政要実録』や『大岡仁政録』の段階で「大岡政談」に収められた長編である。[41] 沢田左内が印象的な色悪にも関わらず、この事件は近代以降の実録本や講談速記本には収録されておらず、どこかの段階で「大岡政談」から消えている。あくまでも可能性、という指摘に止めたいが、事件の発生部分を残し「村井長庵一件」に吸収された可能性を感じさせる。

おわりに――黙阿弥の作意、小団次の技芸

「村井長庵一件」の特徴が登場人物の描写にあることを確認してきたが、最後に実録講談との比較を通じて、『覗機関』における黙阿弥の作意と小団次の技芸を考察してまとめに変えたい。

『覗機関』の主人公は長庵と久八だが、長庵に実録講談以上の描写はなく、歌舞伎化に伴い黙阿弥が加筆したのは久八の描写である。久八が善人という設定は実録講談から受け継いだものだが、善人ぶりがより徹底しているのである。その違いは、事件の経緯と裁判の展開から明らかである。

実録の久八は、まず「当家に幼年の頃より奉公して番頭とまで出世をなし、忠義無類、世間にて伊勢屋の白鼠と言いはやし、誰知らぬ者もなき評判」とされる。千太郎の罪を引き受けて紙屑買いに身を落とすものの、なお廓通いを止めない千太郎に意見するため胸

ぐらを掴み絞殺してしまう。「とかくするうち久八が、忠義一途に手先まで凝り固まりて、千太郎が咽喉の呼吸を思わずも締めたるものか」とあるように過失なのだが、殺人者であることは変わらない。「久八のごとき忠義は町人にめずらしき者なれど、過って主殺しの大罪を犯すに至れる事恐るべき次第なり」というように善人も罪を犯すことはあり、それに温情を施した大岡が偉大であるとして、久八の個性は大岡の仁政に吸収される。

一方、歌舞伎では千太郎は元から自害するつもりで、久八の刺殺はそれを止めようとしたためだった。自害の意志を記した書き置きも見付かり、久八を犯罪とは無縁の男にしようとする黙阿弥の強い意思がうかがえる。すなわち歌舞伎の久八は裁判官を引き立てるための存在ではなく、その善人ぶりが見どころとなっている。とはいえ、久八が類型的な辛抱立役に止まっていることも確かで、同じ善人でも黙阿弥の先行作の座頭文弥や正直清兵衛のような個性は見出せない。

一方でその善人ぶりは長庵の造形にも影響を及ぼし、長庵は久八の忠義に心打たれて自白する。実録の長庵は改心しないため歌舞伎化に伴う改変だが[42]、唐突で、奉行所対策という理由もあろうが違和感がある。この点について三木竹二は「久八の篤実なところを見せて、それで長庵に白状させるのが作者の山で、又それを仕生かすのが小団次でなくてはならぬところでござります[43]」とするが、これは本作の本質をついた指摘のように思われる。すなわち黙阿弥が会心作と自負する『覗機関』の面白さとは、小団次の技芸を前提にしている、ということである。

その技芸とはいかなるものだったのか。初演の劇評に共通するのは「小団次の長庵と久八実と悪の二役達者にして好評[44]」というように二役の演じ分けのうまさである。そのうち長庵については、「元医者の陸尺をしてゐた奴が見様見真似で藪医者に成たので故人米升にはそつくりと云はまり物[45]」であったといい、さらに重兵衛殺しの迫力、辻番における図々しさ、長庵内の憎たらしさが伝わる。一方で久八に関する記録は乏しく、仙太郎を殺して狼狽する様子が「到底尋常の役者には出来にくい[46]」と伝わるくらいである（日本堤）。その他久八の見せ場は、廓通いを止めない千太郎への諫言（伊勢屋）と、屑買いに寄った貧乏長屋で落ちぶれた旧主の縁者と対面する愁嘆場（裏借家、紙屑屋）である。どちらも陰鬱な場面で、「伊勢屋」では長台詞を浪々と述べ、「裏借家」では竹本にのせて身の上を語り合う。やはり歌舞伎化に伴い描写が拡大しているが、小団次のいかにも深刻な演技がうかがえ、その臭さが観客の涙を絞ったと思われる。

上演史をたどると、幕末から明治十年代半ばまでの上演は坂東太郎によるものと小芝居の数回だけで、大歌舞伎による再演はようやく明治十七年一月新富座のことだった。九代目団十郎の長庵と初代左団次の久八だが不評。その詳細は、左団次は「親仁（注、小団次）の俤げ有て大出来」だったが、団十郎が「極々淡泊生まじめ（なきこと）」で「一向狂言をしず随分面白く無事」だったという[47]。長庵が立派すぎてまるで御殿医のようだったというが、元より団十郎の柄には合わない役で、やむを得ぬことだろう[48]。

しかし不評の理由は何よりも二役を二人で分けて演じたためと思

われる。そもそも大歌舞伎で長らく上演されなかったのは「故人小団次の当狂言にして今以て目先にちらつきゐる位」[49]で演じ手がいないためであった。そうした事情は、『覗機関』を演じたがった五代目菊五郎に、黙阿弥が柄が違うから無理だと断り、代わりに『盲長屋梅加賀鳶』（明治十九年三月千歳座）を書き与えた有名な話からも裏付けられる。団十郎と左団次が役を分けた経緯は不明だが、役者の希望にしろ黙阿弥の意向にしろ、そこには小団次の影がある。

そしてそれは、黙阿弥没後の作品評価にも通底するもので、一例が合評「標新領異録」（明治三十年）である。依田学海を上置きに三木竹二を中心にしたこの合評で、『覗機関』は痛烈に批判された。もとより黙阿弥に批判的な人物が集まっているが、作品構造の巧みさを認めつつも、殺しに次ぐ殺し、クドい愁嘆場と竹本、一方で華やかさと色気は皆無、といった内容に一様に強い拒否感を示すのである。その一方で目につくのは、例えば尾崎紅葉が「紙屑屋」について、「此狂言を二度見る気のせぬのは、殊に此一幕の酸鼻に堪へざらしむるの甚しき」としながらも、「之を世話場上手の小団次に為れたら、涙尽きて継ぐに血を以てしなければなるまいと想はれます」[50]と愛憎半ばする感情で述べるごとく、「小団次であれば」という理解なのである。

上演にしても、もとより本作に型はなく、小団次の芸を受け継ぐ役者もおらず、今日にいたるまで当たり役とする役者もいない。すなわち『覗機関』は小団次一代の演目であり、黙阿弥の会心作との自負もまた小団次と切り離せぬものであった。歌舞伎とは作品と役者が密接に結びついた演劇であることは改めて述べるまでもないが、そうしたなかにあってもなお黙阿弥と小団次の関係性が特筆すべきものであることは、従来歌舞伎史で指摘されてきた。『覗機関』において黙阿弥が小団次の個性を引き出すべく筆を揮ったこと、そして小団次没後の評論と上演の様相もまた、その証明といえるのである。

註

1　関根黙庵「黙阿弥翁の事ども」『歌舞伎』175号（大正四年一月）。
2　「標新領異録」『めざまし草』（明治三十年五月）所収。尾崎紅葉による評。
3　前掲記事（注2）。饗庭篁村（竹の屋主人）による評。
4　昭和二十四年八月新橋演舞場（二代目市川猿之助）、昭和五十四年八月国立劇場（二代目中村吉右衛門）。
5　朱筆書入れの情報は早稲田大学演劇博物館編『江戸芝居番付朱筆書入れ集成』（早稲田大学出版部、平成二年）による。
6　明治二十一年六月九日から同年八月十二日の付録として不定期連載。
7　「読売新聞」明治二十一年五月二十七日。
8　管見に入った初演系写本は以下の通り。
(1)東京大学国文学科国語研究室所蔵（大惣文庫）。［28・130・6570］縦本十冊。
(2)早稲田大学演劇博物館所蔵。横本二冊、縦本一冊。［イ12-296-1］横本、発端／駿府宿旅籠屋の場／江尻縄手辻堂の場／冨澤町甲州屋の場、篠田金次。［イ12-296-2］横本、四幕目／厳島

廻廊の場／猿楽町芝居の場、狂言堂左交。［イ12-298］縦本、第一番目三幕目／鶏舌楼の場／衣紋坂の場、狂言堂。上演されない幕のみが散逸せずに残ったと思われる。

ここでは初演系写本の条件として［役者名表記］かつ［作者署名］を備えるものとしたが、［役者名表記］のみであれば他にも数種現存する（演劇博物館、国立国会図書館蔵）。初演系写本（役者名表記のみの写本も含め）は細部も含めてほぼ同内容である。

9　『勧善懲悪覗機関』並木五柳綴、二代目歌川国貞［梅蝶楼］画、全三編各上下二冊、計六冊。改印は初編二編「戌八改」、三編「戌九改」。文久二年八月から九月の出版で、初日前に制作されている初編・二編は草稿を反映している可能性が高い。本書の影印・翻刻は国立劇場調査養成部『〔正本写合巻集・17〕勧善懲悪覗機関』（日本芸術文化振興会、平成二十八年）に収録されている。

10　演博本の作者署名は「狂言堂」のみ。

11　主な翻刻は以下の通り。

(1)「読売新聞」前掲（注7）。

(2)『狂言百種』（春陽堂、明治二十五年）。

どちらも初演系写本と台詞の細部が異なるのみで目立った違いはない。より初演系写本に近いのが「読売新聞」で、『狂言百種』を元に『黙阿弥脚本集』（春陽堂、大正九年）および『黙阿弥全集』（春陽堂、大正十三年）が編まれている。収録幕はいずれも同じ。なお、「読売新聞」は『覗機関』に先立つ『鼠小紋東君新形』『三人吉三廓初買』は役者名表記だが本作は役名表記。版権登録を目的とした「演劇脚本」（歌舞伎新報社、明治二十一年）は「小路街村井長庵内／赤羽根十兵衛殺／白河天神裏門」を収録。なお、「演劇脚本」は他作品では担当幕を収録する傾向にあるのだが、本作は治助の幕（初演系写本の署名による）を収録している点に疑問が残る。

12　渥美清太郎「系統別歌舞伎戯曲解題」のうち「村井長庵」の項。参照は国立劇場調査養成部調査記録課『〈歌舞伎資料選書・11〉系統別歌舞伎戯曲解題』下の二・索引（日本芸術文化振興会、平成二十四年）一三七頁による。

13　渥美清太郎「系統別歌舞伎戯曲解題」のうち「遠山甚三」の項。参照は国立劇場調査養成部調査記録課『〈歌舞伎資料選書・11〉系統別歌舞伎戯曲解題』下の一（日本芸術文化振興会、平成二十三年）二三九頁による。

14　坂東太郎の名跡に関わる情報は国立劇場調査資料課編『歌舞伎俳優名跡便覧［第三次修訂版］』（日本芸術文化振興会、平成十八年）による。

15　例えば『鼠小紋東君新形』（安政四年正月市村座）においては辻番付に「小団次病気節々休」とある。

16　「当時講談や人情噺で演じられていた演目（速記などの通称は「文化白浪」）から執った。また『竿忠の寝言』（昭和六年）にその原型といわれる深川の漁師「モナガシ松五郎」の逸話が伝えられている」（長谷川伸『材料ぶくろ』青蛙房、昭和三十一年）。

17　伊原敏郎『近世日本演劇史』（早稲田大学出版部、大正二年）五八七頁。左団次の談話として紹介。

18　この点、「自分の小柄の所が小団次に似て居るので小文次と云

ふ名を小団次に貰ひましたが、あまりづぼらなので其名を取上られたゝめ、市川の向うを張る心持で坂東太郎と自称した」（前掲記事（注2））という説もある。

19 『演劇界増刊　百人の歌舞伎俳優』（演劇出版社、昭和三十年）五二頁。

20 三島霜川「中所名優の憶出」『演芸画報』（大正十四年三月）二〇頁。

21 慶応四年四月守田座『小田館静浪草紙』、明治八年二月中嶋座『勧善懲悪仁政美談』、明治十一年十月戎座『勧善懲悪覗機関』。いずれも長庵と久八の二役を演じている。

22 田村成義『続続歌舞伎年代記　乾』（市村座、大正十一年）。

23 前掲書（注12）。

24 『長柄長者黄鳥墳　刀筆青砥石文』絵入文庫20巻（絵入文庫刊行会、大正十五年）三八頁。

25 実録にも、妹娘の身売りの協力者として近所の後家・お定の名が記される。しかしその後は登場せず、判決文にも名が無く、歌舞伎からの逆輸入の可能性が高い。

26 河竹繁俊「村井長庵雑記」（古劇研究会『世話狂言の研究』天弦堂書房、大正五年）。

27 今岡謙太郎「解題」『〔正本写合巻集・17〕勧善懲悪覗機関』前掲書（注9）。

28 麻生磯次『江戸文学と中国文学』（三省堂、昭和二十一年）二七二頁。

29 明和六年書写、内閣文庫、一冊。

30 安永六年書写、東京大学総合図書館、三冊。

31 嘉永三年書写、加賀文庫、二冊。

32 書写年次不明、加賀文庫、四冊

33 書写年次不明、小二田誠二蔵、六冊。菊池庸介『近世実録の研究　成長と展開』（汲古書院、平成二十年）所収の翻刻による。

34 慶応三年書写、加賀文庫、六冊。

35 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第八巻、寄席・見世物（三一書房、昭和五十一年）掲載の番付による。ただし江戸時代の番付は四枚しか掲載されておらず、参考程度の情報となる。

36 実録は『今古実録　大岡仁政録　村井長庵之記』（栄泉社、明治十六年）、講談は神田伯山講演・加藤由太郎速記『明治裁判大岡政談　村井長庵』（銀花社、明治三十年）を底本にした。

37 この点、岡村柿紅が「講釈の方では十兵衛殺しの探偵談になっています。各方面からだん〳〵犯人は長庵ということが解ってゆくところは、どうしても探偵談です」と指摘している（「芝居合評会　村井長庵」『演芸画報』大正九年二月）。

38 前掲記事（注2）。

39 前掲記事（注2）。

40 前掲書（注33）三四二頁。『大岡秘事』は『大岡政要実録』『大岡仁政録』と同系統の実録で「栗橋一件」も同一の内容を収録する。

41 岡田哲「馬場文耕と「大岡政談」――大岡忠相出世譚を軸として――」『國學院大學大学院文学研究科紀要』第12輯（昭和五十六年）。『大岡政要実録』『大岡仁政録』は板倉捌きを除外し純粋

に「大岡政談」となった実録で、「天一坊一件」「白子屋お熊一件」もこの時から収録されたという。

42　ただし改心するのは講談も同様。長庵は罪が明らかになった後に改心し、道十郎の女房および二人の姪など関係者に謝罪する。

43　前掲記事（注2）。

44　前掲書（注22）。その他、河竹繁俊『黙阿弥全集』4巻「解題」（前掲書（注11））、渥美清太郎「系統別歌舞伎戯曲解題」（前掲書（注12））にも同様の評判がのる。

45　六二連総連編『俳優評判記』26編（明治十八年四月）。初演を知る高須高燕による記事。引用は六二連総連編・法月敏彦校訂『〈歌舞伎資料選書・9〉六二連俳優評判記』下（日本芸術文化振興会、平成十七年）一九二頁。

46　前掲記事（注2）。

47　前掲書（注45）。

48　その認識は「読売新聞」に台本連載時の宣伝に「村井長庵手代久八を菊五郎か左団次とし〔略〕読者自ら新役割と定め玉はゞ興味一層深からん」と記されていることからも裏付けられる（「読売新聞」明治二十一年五月二十九日）。

49　前掲書（注45）一九二頁。

50　前掲記事（注2）。その他、饗庭篁村は「今見ては理にかなはぬ事も多く惨たらしく長たらしくて、よしや菊五郎、九蔵〔注、七代目市川団蔵〕が技をふるふとも書下し時代の見物の十分の一の興味も感じ得ぬことなるべし」と述べている。